

本をつんだ小舟

宮本 輝



文藝春秋



日文 701674725

104130

本をつんだ小舟

宮本 輝



日本財団支援

佐川良一記念文庫

文藝春秋

財団法人日本科学協会

本をつんだ小舟

一九九三年一月二十五日 第一刷

(定価はカバーに
表示してあります)

著 者 宮 本 輝

発 行 者 阿 部 達 児

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表〇三三二六五一一二一一

印 刷 凸 版 印 刷

製 本 加 藤 製 本

万一、落丁乱丁の場合は送料当社負担でお
取替致します。小社営業部宛お送り下さい

ISBN4 16 347120 0 C0095

© Teru Miyamoto 1993, Printed in Japan

目次

- | | | |
|---|----------------|----|
| 8 | 宇野千代「おはん」 | 79 |
| 7 | 「寺山修司歌集」 | 69 |
| 6 | ファールブル「昆虫記」 | 59 |
| 5 | 山本周五郎「青べか物語」 | 49 |
| 4 | ボードレール「悪の華」 | 39 |
| 3 | フロベール「トロワ・コント」 | 29 |
| 2 | 上林暁「野」 | 19 |
| 1 | ジョセフ・コンラッド「青春」 | 9 |

9 水上勉「飢餓海峡」 89

10 チェーホフ「恋について」 99

11 カミュ「異邦人」 109

12 井上靖「あすなろ物語」 119

13 ドストエフスキー「貧しき人々」 129

14 柳田國男「山の人生」 139

15 老舍「茶館」 149

16 泉鏡花「高野聖」 159

- 17 ドルトン・トランボ「ジョニーは戦場へ行った」
169
- 18 中野重治「雨の降る品川駅」
179
- 19 フォースター「インドへの道」
189
- 20 永井龍男「蜜柑」
199
- 21 ツルゲーネフ「はつ恋」
209
- 22 「山頭火句集」
219
- 23 メリメ「マテオ・ファルコネ」
229
- 24 深沢七郎「檜山節考」
239

25 ゴーゴリ「外套」 249

26 三好達治「測量船」 259

27 樋口一葉「にぎりえ」 269

28 北杜夫「どくとるマンボウ航海記」 279

29 ラディゲ「肉体の悪魔」 289

30 サマセット・モーム「雨」 299

31 大岡昇平「野火」 309

32 島崎藤村「夜明け前」 319

あとがき

328

装幀

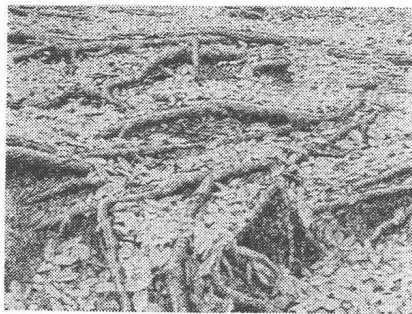
宮川
一郎

本をつんだ小舟

〔1〕 ジョセフ・コンラッド「青春」

東洋の海に燃え上がる炎が
羅針盤のない

私たちの人生を映し出す



実際、私は小舟のようなものだった。十四歳の初夏から十八歳の冬まで、私という鱗もなく、舵もなく、まともな舵もついていない小舟は、いまにも沈没寸前の状態で、あちこちの海をあてどなく漂流していた。時代でいえば、昭和三十六年から四十年の終わりにかけての、日本が急速に経済発展していったころだった。

それなのに、私たちは貧しかった。いま思い起こせば、よくもまあ、あのとき沈んでしまわなかったものだと、ぞっとする瞬間が幾つもある。断片として浮かび出る光景は無数にあるが、少年の自分がその光景の中で何を考えていたのか、まるで思い出せない。いたい、思い出せない〈自分〉とは何であろう……。

けれども〈おんぼろ小舟〉は、なにも私だけだったのではない。その年頃の少年は、みんな〈おんぼろ小舟〉だったに違いない。何もかもが思いどおりにならず、内側から噴き出てきて行き場を失くす自我や、正体不明の抑えようのないエネルギーを持て余し、自分という小舟をどう扱ったらいいのか見当もつかないまま、ただやみくもに波や風に逆らっている。

私の周りにも、波に飲み込まれて消えていった小舟がたくさんあった。ある意味では、もっとも人間臭い年頃なのだから、何もわからないくせに荒海に突進し、いとも簡単に大波や竜巻に誘い込まれてしまうのも無理からぬことである。

私と仲のよかったKちゃんは、母親が愛人を作って行方をくらましたあと、半年もたた

ないうちに、近所の不良仲間とオートバイをすつとばし、夜更けの交差点でタクシーと衝突して死んだ。高校生になったばかりだった。

Kちゃんは死ぬ三時間ほど前、私の家に立ち寄り、オートバイに乗せてやるから来ないかと目をきよろきよろさせながら誘った。私は、読みかけの小説があと十ページくらいで終わるところだったので、Kちゃんの誘いを断った。あきらめて行きかけたKちゃんに、私は、あの不良仲間と本気でつきあっているのかと訊いた。——あいつら、ええやつやで——。Kちゃんはそう言って、なんだか元氣のない顔でほえんだ。貧しかったKちゃんの死を、私は随分あとになってからも、なぜか自分のせいのように感じたものである。

私は本を読むのが好きだった。勉強も嫌い、スポーツも嫌い。兄妹もなく、友だちもあまりいない。父は借金取りから逃げて家に帰ってこない。母は希望を喪^{うしな}つて昼間から酒にひたり、目を離すと市電のレールの上を歩いていたりする。当時は、そんな生活だったのである。そんな私という小舟には、古今東西の本が積まれていた。私は何も持っていないが、読みたい本がたくさんあった。それらは、図書館で借りたり、少ない小遣いをためて古本屋で買ったりのだった。

私は、いかなる本を読んで、よるべない時代をすごしたのだろう。それを書き留めておくことも悪くはない。それで、いわば少年時代の読書録なるものに私は、へ本をつんだ小舟と題して、そのときどきの自分にまつわる光景とともに、幾つかの小説のことを書き

しるすことにしよう。

私がコンラッドの「青春」を読んだのは、Kちゃんが死んで三カ月ばかりたったころだったと思う。そのころ、父は商売を再開し、母の表情にも幾分かの余裕が生じていた。私の担任の先生は、紀仲晋^{きなかずむ}という若い英語の教師で、私に対してなぜか寛容であった。

関西大倉高校という男子生徒ばかりの私学だったので、校則も、風紀への目の配り方も厳しかったが、紀仲先生は、私が授業中に小説を読んでも、しばしば知らんふりをしてくれていた。コンラッドの「青春」は、そのほとんどを、授業中に読んだのである。

コンラッドは、生涯にわたって海と人間を描きつづけたイギリスの作家で、「ロード・ジム」「台風」「ナーシサス号の黒人」などの多くの作品があるが、私は「青春」という短篇が好きだ。

この小説は、かつてなんらかの形で船に乗っていた五人の男たちが（たとえばある客船のボーイであったり一等運転士をしていたり）、年老いて互いに酒をくみかわしながら、マローウという老人の昔話に耳を傾けるといった形式で始まる。

そう、おれも東洋の海を少しは見ているよ。それにしても、一番よく覚えていたのは、あちらへの最初の航海だな。君たちも知っているとおり、人生を描き出すた

めに筋道が組み立てられたような、生存の象徴とも見てとれるような航海がある。何かやりとげようとして苦闘し、けんめいにやり、汗にまみれて、死ぬほど力のかぎりをつくし、時には死んでしまっても——やりとげることができない。けっして自分が悪いからではない。ただ、大きなことも小さなことも、何もできない——まるで何ひとつできない場合がある——年をくった娘を女房にすることさえできず、たかが六百トンばかりの石炭の積荷を目的港へ運んでいけないことだってあるものだ。

マーロウなる老人の話の、この切り出しの言葉の中に、コンラッドが人々に送ろうとしたメッセージの眼目が、すでに秘められている。この老人の言葉は、多くのものを示唆し、人生の不可知な領域の広大さや、自然への畏敬や、人間の情熱というものの源泉に触れているのだ。

「青春」を読み進むにつれて、私たちは確かに、人間の弱さや強さを思い知らされ、人生という航海を羅針盤も持たずに船出してしまったことに気づいていく。その人間の傲慢と自然の凄さ、人間の愚かさへの自然の鉄槌。コンラッドは、十七歳の秋から二十年間、船員として地中海や南米やオーストラリア、さらには東洋への航海を体験しつつ、それらを如実に見つめつけたのであろう。

高校一年生の私には、当時「青春」は単なる海洋小説にしかすぎなかったが、年齢を経

ることに、そんななまやさしい作品ではないことに気づいていった。マローウの話の冒頭に隠された人生の謎や、それへの示唆は、高校一年生の少年にはまだ理解できなかったのだ。

マローウは、若き日の、東洋への初めての航海のありさまを話しつつける。

六百トンの石炭をタイのバンコクへ運ぶため、ジュデア号という古い船でテムズ河口から船出する。さっそく嵐が襲ってくる。大風、稲光、雷……。こわれた舷^{げん}牆^{じょう}の修理に何日かが費やされる。

やっと再び船出した途端、こんどは汽船と衝突する。被害はたいしたものではなかったが、それでも港で三週間もつながれたままになる。イギリス海峡を通過するまでは順調だった。ところが再び大嵐がやって来た。

海は沸き立つミルクの太がまみたいで、あわが敷きつめられたように白く広がっていた。雲には切れ目がなかった——まったく、人間の手のひらほどの切れ目も——ほんの十秒間も現われはしなかった。おれたちには空がなかった。星もなく、太陽もなく、宇宙もなかった——ものすごい雲と、たけり狂う海があるばかりだった。

小さな港に命からがら辿^より着き、修理にまた何日もかかった。そしてやっと船出。追い